

東アジアと福岡

East Asia Fukuoka

第4回 11月18日(土)

唐風文化・国風文化 と鴻臚館

大阪大学大学院
河上 麻由子 氏

変革と調和の

交流史

2000年

へんかく

ちょうわ

令和5年度福岡市埋蔵文化財センター考古学講座

入場無料

会場 福岡市博物館

(福岡早良区百道浜3丁目1-1)

時間 13時30分～15時00分

※各回の定員や申込方法は、市ホームページでお知らせします。

主催・問い合わせ先

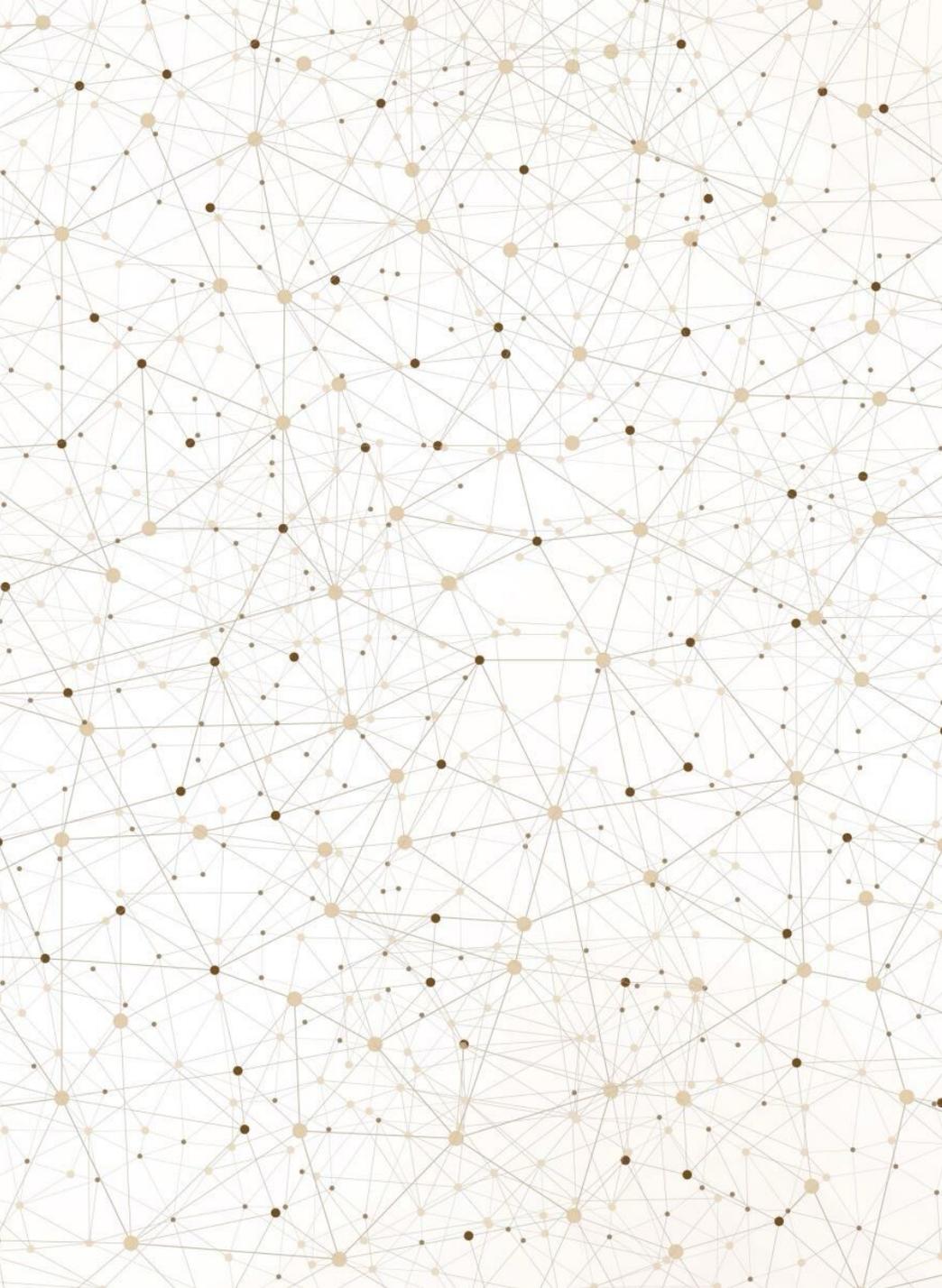
福岡市埋蔵文化財センター

〒812-0881 福岡市博多区井相田 2-1-94
TEL : 092-571-2921 FAX : 092-571-2825
電子メール : maibun-c.EPB@city.fukuoka.lg.jp

埋蔵文化財センター
ホームページ



※会場は福岡市博物館になりますので、ご注意ください。



唐風文化・国風文 化と鴻臚館

大阪大学大学院 河上麻由子

第1部 唐風文化と最後の遣唐使

前回は田中先生によって、9世紀までの福岡が論じられたと思います

変動の9世紀東アジア

❖ **東アジア全体では...**（今日は、「東アジア」をパミール高原よりも東のユーラシア大陸に使います）

- 840年にウイグル帝国が崩壊
- 842年には、古代チベット王国でツェンポ（国王のこと）が暗殺され、こちらの帝国も分裂していく
- 841年（または846年）新羅の張保臯が反乱
- **会昌の廃仏**が起こる（次の次スライド）

❖ **日本では**

- **最後の遣唐使**が派遣される（この章で説明）。
- 東シナ海は、**海上商人（海商）**たちが盛んに往来するようになる。海商が利用したのが**鴻臚館**（次の章で説明）

世界帝国だった「唐」の縮小

- **会昌の廃仏**で弾圧の対象になったのは、仏教だけではなく、マニ教・ゾロアスター教・イスラム教・キリスト教といった外来の宗教も、ひとしなみに弾圧された。
 - 最後の遣唐使で入唐した円仁は、**843年4月**にマニ教僧殺害の勅命が下ったと記している。このマニ教は、ウイグル帝国で信仰された宗教。
 - かつて中央アジアの覇権を争った二大帝国の滅亡と凋落は、唐を巻き込む混乱の開始を予測させるものだった。唐は排外意識を募らせ、仏教を含む外来の宗教を弾圧した。（石見清裕「円仁と会昌の廃仏」鈴木靖民編『円仁とその時代』高志書店、2009年）
- **隋代以来、諸国の使者・物・留学生らを受け入れてきた唐の国際性は過去のものに。**

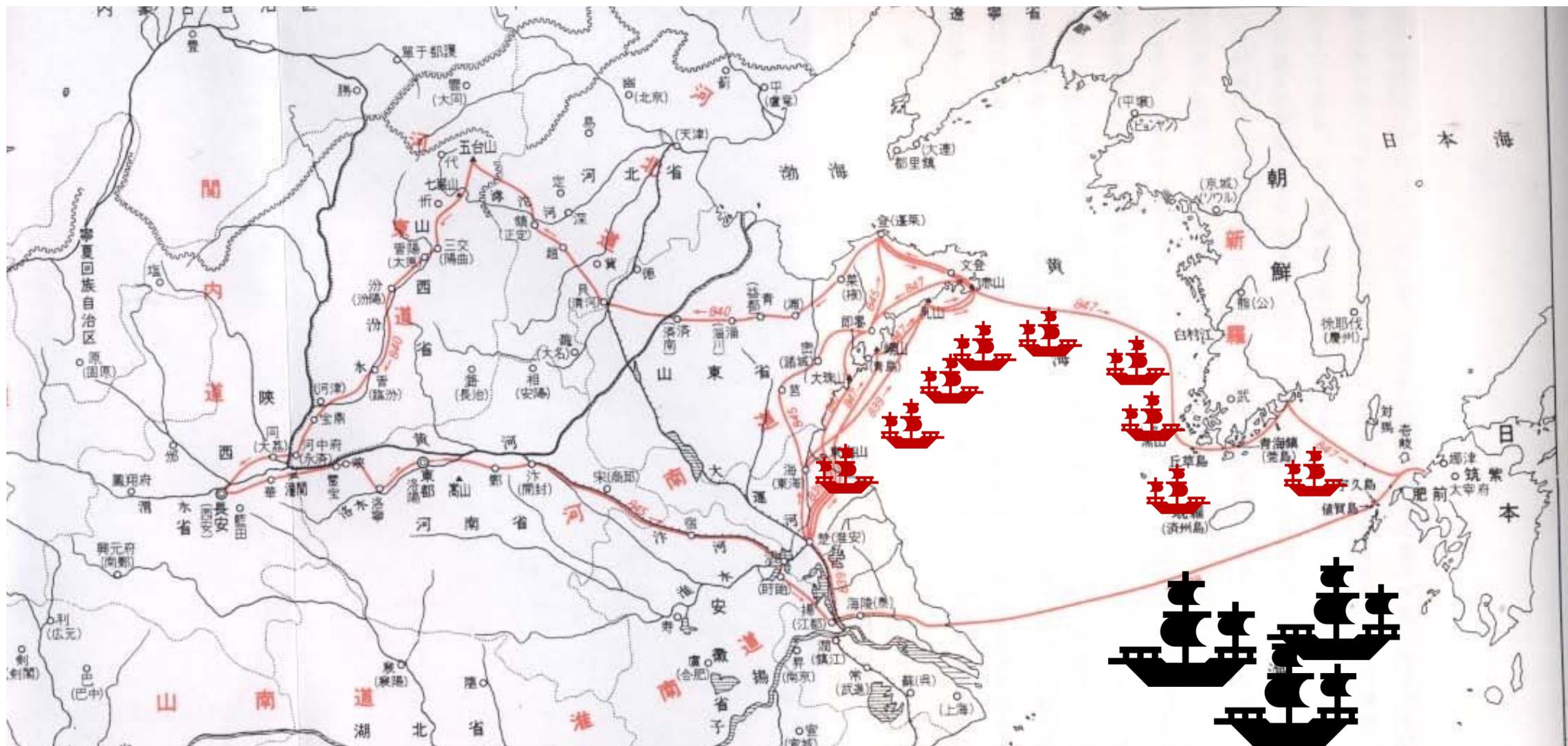
氏名	入唐	帰国	備考
(真濟)	836		真言宗還学僧。第一回出航時に遭難。再度の派遣を許されず
(真然)	836		真言宗留学僧。第一回出航時に遭難。再度の派遣を許されず
円行	838	839	真言宗の還学僧。長安青龍寺で「唐決」を得て、遣唐使とともに帰国
円仁	838	847	天台宗の還学僧に任じられるが、揚州から未決を天台に持参することを許されず、帰国の途につく。途上、遣唐使船から降りて赤山法華寺に滞留、在唐を許可されて五台山と長安で仏法を学んだ
円載	838		天台宗の留学僧。在唐を許可されて天台山に入る。後、入唐した真如法親王や円珍の留学に便宜を図る。877年に帰国の途につくが遭難して死没
戒明	838	839	法相宗の還学僧。弟子の義澄を伴う。遣唐使とともに帰国
常暁			三論宗の留学僧。真然の渡航が不許可となった後、真言の留学僧としての役割も兼ねることになった。ただし留学は許可されずに遣唐使と共に帰国
春苑玉成	838	839	陰陽請益生。未決を持参。遣唐使とともに帰国し、「難儀」一卷を献上
長峯氏主	838	839	紀伝道の留学生。留学は許可されず帰国
菅原梶也	838	840	医術に長けており、「疑義」を問うために入唐
(佐伯安道)			暦道の留学生。入唐を拒否して流罪
(刀岐雄貞)			暦道の請益生。入唐を拒否して流罪
(志斐永世)			天文道の留学生。入唐を拒否して流罪

唐風文化と遣唐使

- この遣唐使では留学生以外にも、琴の名手として知られる**良峯長松**が遣唐判官に選ばれている。良峯長松の唐における活動は伝わらないが、遣唐准判官である**藤原貞敏**は、揚州の開元寺で琵琶を学んで楽曲を伝えた。朝廷は、使節を率いるトップ集団（大使・副使・判官・録事といった四等官）にも、文化の伝来者となることを期待していた。
- ほかに、音声長（遣唐使の行列や船行に威儀を正すに音声生を指揮）の**良枝清上**は、在唐中に「清上楽」を作っている。画師・雅楽笛笙師の**良枝朝生**と、舞師の**犬上是成**も入唐した。琴や琵琶、雅楽の整備に対する強い関心は、**唐風**の宴が整備されつつあったことを背景とした。使者らの帰国により、嵯峨から仁明天皇の時代における楽制改革は完成に向かう。

渡辺信一郎『中国古代の楽制と国家 日本雅楽の源流』（文理閣、2013年）、遠藤慶太『仁明天皇』（吉川弘文館、2022年）

◦ **最後の遣唐使による唐風文化への多大な貢献**



839年8月に帰国した遣唐使たちは入唐時に3船が損壊したため、楚州で新羅船9隻を雇い、新羅沿岸を經由して帰国
図は小野勝年『入唐求法巡礼行記の研究 第1巻』（鈴木学術財団）を加工

鴻臚館を訪れる商人たち

第二部

「閉じられる」9世紀の鴻臚館

- 『三代実録』 貞観5年（863）4月癸丑

これよりさき、太宰府が言上していうことには、「**新羅**の沙門である元著・普嵩・清願の三人が、博多の津の岸に着きました」という。ここに至って、**勅して鴻臚館に安置させ、**糧食を支給し、**唐人の船が来るのを待って******、放却させるよう命じた。

- 『三代実録』 貞観15年（873）12月癸丑

これよりさき、大宰府が言上していうことには「去る九月廿五日に、**新羅**の人が32人、一隻の船に乗って、対馬の岸に漂着しました。嶋司は使者を派遣して太宰府に（新羅人たちを）送り届けてきたので、（太宰府では）即ちその身を拘禁し、**鴻臚館に留置してあります**」という。この日勅して言うことには「新羅の人は昔から奢りたかぶって、兇毒なたちは改まることもない。漂流したという体を装って、実際には隙をうかがっているのではないかと疑わしい。さらに捜査し、詳しく事情を調べて、早く彼らを帰国させるように」という。

「開かれる」9世紀の鴻臚館

- 『三代実録』貞観7年（865）7月丙午

これよりさき、大宰府が大唐の商人李延孝等63人が船一艘に乗って海岸に到着したと言上してきた。（そこで）この日、**勅して鴻臚館に安置させ、通例により供給させた。**

- 『三代実録』貞観8年（866）10月甲戌

これよりさき、9月1日に大唐の商人張言等41人が船一艘に乗って大宰府に到着した。（そこで）この日、太宰府に勅して**鴻臚館に安置させ、通例により供給させた。**

▶新羅における政情不安をうけて、朝廷では新羅への不信感が高まっている。

▶背景には、東アジアの動乱がある

▶警戒感に基づく排外意識が高まる一方で、「唐人」を名乗る海商たちが鴻臚館に続々とやってくる

海商はどれくらいの頻度で来ていたのか

- 惠萼は、俗名や生年といった基礎的な情報は不明なものの、下掲の表にあるように、六度も入唐したことで古代史研究者の間では著名な僧侶。（次スライドの表は、田中史生氏の『入唐僧惠萼と東アジア 附 惠萼関連史料集』（勉誠出版、2014年）による。一部榎本渉氏の研究によって改めた）

	840年	844以前	848以前	852年	854年	862年
間隔は	4年以内	4年以内	4年ほど	2年	8年	

- 鴻臚館には、ほぼ常に海商がいた

入唐年次	入唐の目的	渡海手段
840年	五台山巡礼	往路 新羅船か。楚州へ 帰路 新羅商人船で明州より
844以前	供養のために五台山を目指すも、廃仏にあって還俗。廃仏から逃れた唐僧義空を連れて帰国	往路 明州へ 帰路 847年に唐商人の船で明州から
848以前	義空の書簡を唐に、義空宛の書簡を日本にもたらす。五台山で唐僧に来日を要請	往路 唐商人の船で明州へ 帰路 唐商人の船で明州から
852年	義空の書簡を唐に、義空宛の書簡を日本にもたらす。送供使として五台山を巡礼	往路 不明 帰路 帰国 唐商人の船で明州から
854年	義空を送って入唐	往路 不明 明州か 帰路 不明 明州か
862年	真如親王に従い入唐	往路 唐商人の船で明州へ 帰路 863年に同船で明州から

新羅商人？唐商人？

- 恵萼が新羅商人の船を使用したのは、上の表にあるように初回のみである。これだけを見ると、新羅商人から唐商人へ、東アジアの海上交易の担い手が変化したようにみえる。しかし、実態として彼ら海商は、時に新羅商人、時に唐商人として史料に登場したにすぎない。

榎本渉「新羅海商と唐海商」（『全近代の日本列島と朝鮮半島』山川出版社、2008年）

唐物と国風文化

国風文化とは、どのような文化だったのか

近年の見解① 「唐物」

• 国風文化は、遣唐使派遣停止後に増加した海商がもたらした、大量の「唐物」を消費する文化だった

❖ 唐物「消費」の一例として、「薫物」と「香炉峰」のスライド

河添房枝『源氏物語時空論』（東京大学出版会、2005年）、同「終章」（『源氏物語と東アジア世界』日本放送出版協会、2007年）。

➤ 唐物は消耗品にすぎない（次スライド『新猿楽記』を参照）。遣唐使により入手できた物品と比較すれば品物の質は低下（東野治之『遣唐使』岩波書店、2007年）

➤ 八郎の扱う品目が唐物の実質を反映しているとするれば、日本人の嗜好に沿って消費することを目的とした物品が、唐物の大半を占めていたこととなる（佐藤全敏「国風とは何か」鈴木靖民ほか編『日本古代交流史入門』勉誠出版、2017年）

薫物（たきもの）

- 薫物は、さまざまな香木や香料を粉にし、丸薬状に固めたものを加熱し香りを立たせるもの。『源氏物語』「梅枝」には、父である源氏が、裳着と入内を迎える一人娘のために、女性たちに薫物の作成を依頼する場面がある。源氏は、集まってきた薫物の論評を弟の兵部卿宮に依頼する。兵部卿宮が下した論評は、紫の上の調合した薫物は華やか、花散りの薫物はしみじみと懐かしく、明石の上は優美、などと物語で描かれる登場人物の人柄と一致する。薫物は、まとう人の個性を表現するもの。
- 薫物は、材料となる香料を海外との交易に頼る。この時代には、香料の他に、高級木材・繊維製品・顔料・薬剤なども輸入され、消費された。そこで、国風文化とは、海上を往来する商人、いわゆる海商がもたらした「唐物」（海外の産物）を盛んに消費した文化であると説明されることがある。

近年の見解② 「和」と「唐」

- ▶ 来日した海商たちは、**南中国沿岸部**を拠点としていた。先にあげた表では、海商たちの出港地・帰港地は明州（現在の寧波）や楚州（現在の淮南）とあった。よって日本にもたらされた唐物は、多かれ少なかれ、南中国の流行を反映しただろう。唐の都である長安周辺の文化を持ち帰ることを最上とした遣唐使の時代と比較して、入手できる物品の性格は大きく異なっていた。
- ▶ 同じ頃、高麗にも、**南中国沿岸部**の商人により多くの「唐物」が持ち込まれ、消費されていた。
- ▶ **国風文化は、唐物を大量消費する文化。その点で、東アジアに直結する文化でもある。**

1012年10月	南楚の人が方物を献上
1017年7月	泉州の人40人が来て方物を献上
1018年閏4月	江南の人24人が来て方物を献上
1019年7月	泉州の人100人が来て方物を献上
1019年7月	福州の人100余人が来て 香薬 を献上
1020年2月	泉州の人が来て方物を献上
1022年8月	福州の人が来て土物を献上
1022年8月	広南の人が来て 香薬 を献上
1026年8月	広南の人3人が来て方物を献上
1027年8月	江南の人が 書冊 597巻を献上
1028年9月	泉州の人30余人が方物を献上
1029年8月	広南の人80人が来て土物を献上
1030年7月	泉州の人が来て方物を献上

が南中国から多くいた
 高麗を訪れていくの時代
 南国風文化と同じ時代
 海商

国風文化と「唐」

- 国風文化は、それまでの文化とは異なり、同時代の中国（五代十国・北宋）をモデルとして見ることはない（**清涼寺釈迦如来像と平等院鳳凰堂の阿弥陀如来像**）
- 私の領域における「和」 = 日本古来の文化と、公の領域における**「唐」 = すでに滅んだ理想としての中国の文化**が並立するもの

佐藤全敏「国風とは何か」（鈴木靖民ほか編『日本古代交流史入門』勉誠出版、2017年）、同「国風文化の構造」（『古代史をひらく 国風文化』岩波書店、2022年）

- 「唐」の規範性は東アジア、特に**北宋でも失われていない。**

新王朝と文物収集

太宗の太平興国二年十月（977）、諸州に詔して先賢の筆跡・書籍を採し尋ねて献上させた。荊湖は**晋**（実際には後漢）の張芝による草書、及び**唐**の韓幹が描いた馬三本、潭州の石熙載は**唐明皇**（唐の玄宗のこと）に献上するために書かれた「道林寺王喬觀碑」、袁州は王澣が宋之間（いずれも**初唐**の人）に献上するために書いた「龍鳴寺碑」を献じた。昇州は**晋**の王羲之・王献之・桓温ら二十八家の石版の書跡を献じ、韶州は**唐**の宰相である張九齡（玄宗の開元年間〈713～741年〉の政治家）の画像と『文集』九巻を献じた。

『宋会要輯稿』崇儒

- ▶ **王羲之（下線部）は唐太宗が好んだことから、唐のイメージが付与されている。**
- ▶ **北宋初期の人々は、唐に強い関心がある**

唐・開元時代の目録を目指した書物収集

(太平興国) 九年 (984) 正月、詔して言うことには「国家が勤めて古より伝わる学問を求め、(人々を) 啓蒙し徳化するというのは、国家の常道・憲章であり、(学問の道を) あまねく奮い起こすべきで、散逸した書物は、訪ね求めるべきである。(書物収集は) 政治を行うにあたり、もっとも優先すべきである。宜しく三館は、所有の書籍を『開元四部書目』と比較し、現在(所蔵を) 欠く(書籍) は、特に(人を) 派遣して探し求めさせるように。ついては、(所蔵を) 欠く書籍を記録し、待漏院に立札をして中外に示せ。もしも臣僚の家で、三館が欠いている書籍を所有していれば、その(書籍を) 献上することを許す」。。

『宋会要輯稿』 崇儒

▶ 建国初期の北宋がモデルとしたのは唐。国風文化時代の日本が唐をモデルとし続けるのは、東アジアでは不思議なことではなかった

今日のまとめ

1. 9世紀の大変動
2. 最後の遣唐使（唐風文化に多大な貢献）は、帰国時には新羅海商の船を利用
3. 鴻臚館の政治的な役割は後退し、商業的な役割が生まれる
4. 海商がもたらした大量の文物は、国風文化の時代に消費された
5. 国風文化は、同時代の北宋ではなく、すでに滅んだ唐を規範視した

→ 4・5の点において、国風文化は東アジア諸国（前者は高麗、後者は北宋）の文化と共通した。戦前の教育がというような、東アジアと切り離された文化などではなかった。

➤ 東アジアの文化とゆるやかに繋がる新たな文化が生み出されていった、その窓口が鴻臚館